

## 読者の声

### 自公連立の解消を期待

会社員 濱田公一・青森県 (55)

■自民党と公明党が東京二十八区をめぐって対立し、東京都内では公明党は自民党の候補者を推薦しないとの事。とてもいい事だと思う。自民党支持者の大半も歓迎しているのではないだろうか。このまま、自民党と公明党の対立が全国に広がり連立政権も解消すればいいと思う。そもそも公明党の支持母体が創価学会はわかるが、公明党の実態、事実からしても、今更言うまでもなく、単なる支持母体とは考えらず、まさに「政教一致」であろう。

この関連ニュースを見ていて情けないと思うのが、公明党の推薦を受けられなくなつて困惑する東京選出の一部の自民党議員のみじめな発言。そもそも、自力で勝てないのなら「辞めてしまえ」と思う。なんとも無様な姿である。自民党と公明党が実際に連立を解消したとしても公明党に近寄る政党がなければいいのだが、与野党共政治屋は、真の日本の将来を考えている人間は何人もいないであろう。なんとも情けない日本の政治である。

### 戦車はかっこいい、はダメ？

建設業 八王子市・男性 (49)

■広島平和記念資料館を再訪した、という三十代男性の投書が五月二十日付けの朝日新聞に掲載されていた。この男性は、来館者の感想ノートに「子どもがニュースでロシアの戦車を見て、『かっこいい』と言つたのを聞き、『これはいけない』と思い、資料館に連れてきた」という文章があつて驚いた、と書き、「誰がそうさせてしまったのか。私たち大人の責任なのではないだろうか」と嘆く。そして次のように続ける。「戦争はあつてはならないものだ。子どもたちにそんな世界を見せてはいけない。日ごろの生活ではなかなか話題にしづらいが、戦争の

残酷さを身近な子どもたちに伝えていきたい。資料館を再訪したことで、強い意識が芽生えた」と。男の子たちは建設用重機を見て「かっこいい」と目を輝かせるのを私は知っている。この投書の男性は知らないだけなのだろう。男の子たちはロボットアニメやウルトラマン、仮面ライダーといったスーパー戦隊シリーズなどの中で侵略者と戦う勇氣を持つことが大事だと知る。この投書の男性は知ることがなかっただけなのだろう。この投書でよく分かったのは、子どもたちにかつてはいけない世界」などむしろあつてはならない、ということであつた。

日本の保守層の悲しい現実

会社員 大阪府・男性(53)

■5月19日から三日間の日程で開催されたG7広島サミットが閉会した時点での岸田内閣の支持率が、読売新聞の世論調査では支持率56%、不支持率33%で、毎日新聞の調査でも支持率45%、不支持率46%と、どちらも前回から9ポイントの上昇が見られた。支那や南北朝鮮寄りの態度を示す一部の人はG7開催に批判的で、暴動にも似たデモ行進まで行われたが、実際に



全国世論調査をしてみればこの通りである。防衛費増額や景気の低迷、入管難民法改正などを挙げて岸田政権を否定する人(マスコミも含め)もいるが、その人々にとっては外交や安全保障といった問題は二の次なのだ。世論調査の結果はその証左である。国民の2人に1人は外交や安全保障を重要視しているということには、一応は安堵できるが、その一方で自民党はLGBT理解増進法の制定を画策している。女性差別の悪法だ。岸田政権や自民党を素直に支持できないのは、つまり真の保守政党ではないからである。日本の保守層の悲しい現実がここにある。

伝統芸能にも影響する「ものづくり」の窮地

主婦 松本みやこ・神奈川県(45)

■歌舞伎俳優の市川猿之助さんが救急搬送され、その父、市川段四郎さんと母の延子さんが自宅でお亡くなりになりました。猿之助さんは「死んで生まれ変わろうと家族で話し合い、両親が睡眠薬を飲んだ」と話されているそうで、自殺とみられています。猿之助さんは漫画の「ワンピース」や「鬼滅の刃」を歌舞伎の演目に取り入れるなど、時代に合わせたアイデアを生み出しました。トライする後継者にはファンがついてゆくの、伝統芸能も消滅することはないでしょう。しかし、伝統芸能の上演に不可欠な道具類を供給する「ものづくり」の場が窮地に立たされています。ある能楽師は「能楽堂は城。面や装束の道具類は武器である」と言いました。能を上演する際に着る衣装「装束」には、織り、糸染、刺繍、縫製など高いレベルの技術が詰め込まれておりますが、装束を作る人は減っていて、專業の織元は1軒のみです。原因は様々ですが、日本は世界各国と比べて文化予算の額が少ないのも大きな問題です。フランスの4394億円や韓国3015億円に比べ、日本の1167億円は少な過ぎます。盆踊りやお祭りなど日本固有の行事にも関係することなので、関心を持っていただきたいと思います。

手を合わせて「いただきます」

無職 東京都・男性 (69)

■初めて投稿します。この「大吼」に論文を寄稿する方や、購読されている方々には、食事を食べ始める際に手を合わせて「いただきます」と言うのは「当たり前」の話かも知れませんが、六十代の私どもの世代には、それができる人が少ないと思われる。少なくとも、私の周囲の同世代には居りません。皆無に等しいと言ってもいい状態です。恥ずかしながら、かく言う私も例外ではありません。からです。しかし、いつからでしょうか、若い人が「いただきます」と小声で呟き、手を合わせてから食事を始めるのを度々目に

するようになりました。初めてそれを見たのは、忘れない、ひとりの大学生くらいの青年が定食屋さんで食事をする時でした。その翌日、ラーメン屋さんでも、その時と同世代くらいの青年が同じように手を合わせてから食べ始めたのです。この時の衝撃は私の人生観を変えたと言っても過言ではないくらいのものでした。それから私も若者の行いを真似て、手を合わせて「いただきます」と言うてから食べるようになりました。それはとても気持ちの良いものですね。私ども年寄りには、自分の行儀の悪いことを「昔はそういう時

代だったから」と言い、「悪いのは俺じゃない」と言わんばかりで言い訳をします。しかし、そんなものは格好が悪いし、それでは「昭和」に申し訳が立ちません。昭和は良い時代だった、と思う一方で、自分の具合の悪さは時代のせいにする。それではいけない、と背筋を伸ばす今日この頃です。それは、この「大吼」を読んでも同じことを思うのです。私よりも若い人たちが、仕事をしながらこうした勉強をし、行動を起こし、日本を良くしようと呼んでおられる。実



に頼もしく、もつと多くの人から尊敬されるべき人たちだと思えます。執筆陣の皆様、これからも勉強させていただきます。心から、ありがとうございます。

合掌

## 横田めぐみさんを忘れないで

無職 新潟市・女性 (78)

■昭和三十九年（一九六四）十月五日、父・横田滋さんと母・早紀江さんの長女として名古屋市に生まれた横田めぐみさんは、昭和五十一年（一九七六）七月、新潟市に転居し、その翌年に同地で消息を絶ちました。ここ新潟にはとても静かな住宅地が多く、めぐみさんは「ずいぶん寂しいところだね。お父さんはここに何年いるのかなあ」と真顔で早紀江さんにたずねたことがあったといえます。北朝鮮に拉致されてしまったのは昭和五十二年（一九七七）ですから、すでに今年で四十六年が経ってしまいました。ご両親は、めぐみさんの写真を見つめては

「一目会うまではがんばろうね」と励まし合ってこられたそうです。しかし滋さんは、その願いが叶うことなく令和二年（二〇二〇）に他界なされてしまいました。父親としての無念は如何ばかりだったでしょう。そう思うと心が痛みます。こんなに平和な日本で、そんな理不尽な思いに苦しむ国民がいる現実が「善良な市民」には見えないのでしようか。その現実と社会状況を冷静に凝視していると、政府に向けられるデモ参加者たちの「戦争反対！」という叫び声も私には歓声にしか聞こえません。お願いです。めぐみさんを早く帰して下さい。

## 在日外国人の人権と日本国民の人命

自営業 埼玉県・男性 (55)

■入管難民法改正の方向性に異議を唱える人々がいる。聞けば「難民受け入れのハードルが上がる」と言う。入管施設で死亡した被收容者に関する問題に絡み、「根拠のない発言を繰り返した」として参院法務委員を更迭された国会議員がいた。また、難民審査参加員が参考人招致で「申請者の中に難民はほとんどいない」と発言して一部から「理不尽な偏見」だと問題視もされたが、「居丈高な論理」だとか「ヘイトだ」といった決めつけも「理不尽な偏見」ではないかと感じる。六月二日付けの朝日新聞に「難民認定を求める外国人の中に、不純な動機

や悪意を持った人や、客観的に難民に当たらない方もいたかも知れない。しかし難民問題は、たとえ少数であつても、守らなければならぬ人権を漏らさず拾い上げることを目標とすべき」という意見が掲載されていた。人種や国籍に関係なく人権は守られるべきだが、どの国も基本的には、その住民の命や権利を守っているのは国境なのである。銃規制の緩いアメリカでさえ自分の身を守るのが大変なのに、護身用の小さなナイフを持つことでさえ銃刀法で許されない比較的小柄な日本国民は、どうやって不良外国人から身を守ればいいのか。教えてほしい。